

保育・教育課程の編成目的と方法に関する考察

—テキストにおける記載内容に注目して—

Consideration on purpose and method of the education and care curriculum formation

杉山 実加¹

¹白梅学園大学

Mika Sugiyama¹

¹Shiraume Gakuen University

1-830 Ogawa-cho, Kodaira-shi, Tokyo, Japan 187-8570

キーワード：保育・教育課程，保育者養成

Key words : Education and care curriculum, Nursery school teacher training

抄録

これまでの研究において、保育者養成段階の「保育・教育課程論」で使用されているテキストにおいて、計画の連続性への意識がほとんど見られないことなどが指摘されてきた。2018年4月には、新たな幼稚園教育要領・保育所保育指針が施行され、保育者には「カリキュラム・マネジメント」が求められていく中で、養成段階においても、教育課程や指導計画について十分な知識や技術を身に着けることが求められる。そこで、本論文では、2015年から2017年の間に出版されたテキストの記載内容を分析し、編成の目的や意義、各指導計画の連続性に即した作成方法について、どのように解説が行われているのかを検討した。結果、計画の必要性において、保育者間の連携や省察の手がかりとなる記録という部分をきちんと明記していた書籍は一部であること、長期的計画と短期的計画の関連性については全てのテキストで解説が行われていたが、その実際について、資料をもとに具体的に解説したテキストは少なく、解説されている場合も特定の記載内容のみを扱っている場合が多いことを明らかにした。

1. 研究目的と分析方法

2018年4月から施行される幼稚園教育要領には、あらたに「カリキュラム・マネジメント」、すなわち「教育課程に基づき組織的かつ計画的に各幼稚園の教育活動の質の向上を図っていくこと」が追加された。また、保育所保育指針でも、カリキュラム・マネジメントと言う文言は使用されていないが、「保育の計画に基づく保育、保育内容の評価及びこれに基づく改善という一連の取組により、保育の質の向上が図られるよう」取り組むとの一文が新設された^[1]。このように、よりよい保育や教育活動を目指すためにカリキュラム・マネジメントが求められているが、その機能の効果が十分に発揮されるには、全体的な計画、教育課程、指導計画を作成する技術を、保育者が獲得していることが前提となる。

しかし、保育者養成課程における「保育・教育課程論」の教授内容に関しては次のような課題が指摘されている。橋村晴美、浅野俊和、塚本恵信の研究では、「長期指導計画と短期指導計画の連動に関する事項」については「ほとんど意識されていない」ことが明らかにされている^[2]。また、庭野晃子も、連続性を示す具体的な事例がテキストに掲載されていないことや、全ての年齢を網羅していないことを指摘している^[3]。

このような先行研究をふまえて、本論文では、上記の研究成果が発表された以降に出版された教科書、すなわち2015年から2017年の間に出版(改訂を含む)された教科書における記述内容を分析する。保育・教育課程の編成目的と意義に関する解説を分析した上で、橋本らの研究で指摘された長期的計画と短期的計画の関連性やその具体化の

方法について、各テキストではどのように解説されているのかを検討する。

本論文で分析対象としたテキストは表1に示した5冊である。書籍検索サイト Webcat Plus を用

いて、「保育課程」「教育課程」に関連する書籍の中で、保育者養成課程での使用を目的として執筆されているものに限定した（2018年1月時点）。

表1. 分析テキスト一覧

No.	編著者・テキスト名・出版社・出版名
(1)	岩崎淳子, 及川留美, 粕沼亘正著『教育・保育課程論 書いて学べる指導計画』（萌文書林, 2015年）
(2)	師岡章著『保育カリキュラム総論—実践に連動した計画・評価のあり方, 進め方』（同文書院, 2015年）
(3)	千葉武夫, 那須信樹編『教育課程・保育課程論』（中央法規, 2016年）
(4)	門谷真希, 山中早苗編著『保育の指導計画と実践演習ブック』（ミネルヴァ書房, 2016年）
(5)	高橋弥生, 大沢裕編著『教育・保育課程論』（一芸社, 2017年）

2. 保育・教育課程の編成目的と意義

まず、各テキストで保育・教育課程とは、何を示すものとして解説されているのか。(1)では、「園生活全体において子どもたちが育っていくおおまかな道筋」を示す「幼稚園や保育所での全生活を見通した最も大きな計画」であると記されている^[4]。また、(6)では「保育所や幼稚園に入所（園）している子どもの生活全体を通じて、保育の目標が達成されるように設定した全体的な計画」であるとされている^[5]。このように、保育所における保育課程、幼稚園における教育課程の両方の解説部分では、「子どもに経験してほしい内容を示すもの」^[6]、もしくは「子どもの育ちと園生活の流れを大筋で体系化した見通し」^[7]、と記されているように、あくまでも想定される事柄や願い、子どもの姿を示したものであるとされている。

続いて、編成の意義についてみると、(6)では以下のように示されている^[8]。

幼稚園や保育所は、一定の保育理念に基づき保育の目的を決め、その目的を達成するために、どのような内容を、どのような手段や方法で実施するかなどについて計画を立てなければならない。

ここでは、保育・教育課程を編成することが「義務」であるということが述べられている。(1)でも、幼稚園教育要領と保育所保育指針において作成が「規定」されていることが記載されている^[9]。

次に、(3)では、「計画はなぜ必要か」という問いに対して以下のように解説されている。やや長い引用となるが、原文まま引用する^[10]。

幼稚園や保育所、認定子ども園には、それぞ

れ園固有の保育理念や保育方針が存在し、その規模や所在する地域性などにより、保育のありようは実に多様である。その多様性に富む保育を実践していくうえで基本となるのが、子どもの主体性を尊重しながら、子ども自らが環境にかかわり、さまざまな環境との相互作用を通して得られる多様な体験を保障し、子どもが新進ともに健やかに育つのをめざすことである。

このことは、専門職としての幼稚園教諭・保育士・保育教諭（中略＝引用者）が果たすべき重要な役割の存在を示すものである。それは「子どもが発達に必要な経験を積み重ねていくことができる環境を計画的に構成し、子どもの心身の状況により適切な援助をする」ことであり、子どもの発達特性と一人ひとりの子どもの実態をふまえた「見通し」ある保育を展開していくことである。ここに、「計画性のある保育」の必要性が指摘される根拠が存在する。

保育の「ありよう」が多様であること、保育の基本として、子どもが主体的に「環境」にかかわることでの育ちを目指すことを挙げ、これを遂行するためには見通しをもって「環境を計画的に構成」する必要があるとして、計画の必要性を説明している。

また、(4)でも、「環境に関わって遊ぶこと」を通して子どもが育ち発達していくことに触れながら、「子どもの興味や発達過程を把握し、計画的に環境を構成する必要があります」とされている^[11]。

2018年4月施行の幼稚園教育要領では、環境を

通しての保育が現行の幼稚園教育要領よりも重要視されている。教育課程や各計画の意義は、(3)や(4)で示されたように、保育や幼児教育の特性を踏まえて解説されていく必要があると思われる。

続いて各テキストでは、「保育・教育課程」の両方を含めた目的と意義の解説とは別に、幼稚園における教育課程、保育所における保育課程について、別項で重ねて解説がなされている。

例えば、(1)では、「教育課程」は「幼稚園に幼児が入園してから修了までの園生活全期間の中で身につける経験内容の総体を示したもの」、「保育課程」は「保育所保育指針の発達過程を踏まえ、保育所生活の全体を通して身につける経験内容の総体を示したもの」とされている^[12]。また、(6)では、「教育課程」は「幼児が入園から修了までの園生活全期間の中で経験すべき内容の総体を示すもの」、「保育課程」は「保育所保育指針に示された子どもの発達過程を踏まえ、子どもたちが保育所生活の全体を通して経験すべき内容の総体を示したもの」と解説されている^[13]。

この解説で注目すべきは、「保育・教育課程」の解説で示されている計画の位置付けとニュアンスが異なっている点である。前述したように、「保育・教育課程」については、「おおまかな道筋」「経験してほしい内容」を示すものであると説明されていたが、「教育課程」「保育課程」の各説明になると、「身につける経験内容」「経験すべき内容」の「総体」を示すものとされている。つまり、各段階での解説になると、あくまでも予測や見通しのもとで作成されるという基本概念の要素が弱まり、「保育課程」「教育課程」で示された内容を、入園(所)した子どもが必ず経験しなければならないと解釈できる表現になってしまっている。各テキストでは、作成のための配慮事項をきちんと解説しているため、学習を進めることで、「保育課程」「教育課程」の性格と役割をきちんと理解することは出来るようになってきているが、記載箇所によって解説のニュアンスが異なってくることは学生の混乱を招く可能性があることが推察されよう。

3. 指導計画とは

続いて、指導計画に関する記述について分析する。まずは、各テキストにおける「指導計画」の解説であるが、これはほとんどのテキストで、次のように記載されている^[14]。

園での生活全体を見通した保育課程・教育課程だけでは、子どもたちと関わりながら日々の保育を行うことは困難です。そのため、保育課程・教育課程に示された保育・教育の目標にむかって、どのような保育・教育を実際に行うかについて、より具体的な計画を立てる必要があります。これが指導計画です。

全てのテキストにおいて、「保育・教育課程」を「具体化」したものとして解説されていた。これは、幼稚園教育要領と保育所保育指針における「指導計画」の解説で「具体化」という文言が出ているためである。

続いて、「指導計画」を作成する必要性や意義については、主に以下の二点を取り上げられていた。

まず、ほとんどのテキストで記載されていたのが、「計画的な環境構成」を行うためというものである^[15]。

行き当たりばったりの偶発的な環境に任せていたのでは、質の高い経験ができない。そのため教師は、子どもの気持ちや何に興味をもっているのか、遊びや活動を展開していくためには何が必要なのかを、長期的視野のもと、計画的に再構成する必要がある。

子どもが環境を通して育っていくためには保育者がある程度計画的に環境を構成する必要があるために、計画を立てるというものである。

次に、一部のテキストでは、以下のような解説もなされていた^[16]。

保育は、一人の保育者のみで行うものではない。子どもにとって、豊かな保育を実践していくためには、保育者が相互に密接な連携を取りながら、園全体の保育を、支えていかなければならない。そのためには、まず日々の保育について、保育者間で共通理解を図ることが重要である。(中略＝引用者) 保育者間の連携や協働をする際に、重要な役割を果たすものが指導計画である。(中略＝引用者) 指導計画は、一人ひとりの保育者の保育の見通しであると同時に、保育者相互の協力体制の下、よりよい保育を形作るために欠かせない記録である。

ここでは、保育者の連携をより良いものにするために、「指導計画」が必要であること、また保育の記録でもあることに触れている。(4)でも、「指導計画を記録として残すことで振り返りが可能」

となるとの記載がなされている^[17].

こうした中で、(2)では、他のテキストでは触れていない「指導計画」の意義について解説している。同テキストでは、「指導計画と立てる」すなわち保育者が「書く」という行為に注目し、他の保育者との共通理解や振り返りの記録となるだけでなく、「予測すべき行動についてのイメージトレーニング」になる点を指摘している。さらに、保育者の見通しと子どもの実態や思いに「ズレ」が生じた際に、気づきやすくなること、あくまでも仮説として「指導計画」を作成するため、「ズレの解消を保育者側の一方的な思いで行うことの防止」になると説明している^[18]。「指導計画」を保育者が作成するという作業についても意義を述べている点で、(2)の解説は特徴的である。

このように、「指導計画」の必要性和意義に関する解説では、テキストによって差異が見られた。

4. 長期的計画と短期的計画の関連性

前述したように、「保育・教育課程」を具体化したものが「指導計画」であると各テキストでは解

説されている。では、その「具体化」の実際についてはどのように記載されているのか。この部分については、文章だけでなく提示された資料や図表部分も取り上げて分析を進めたい。

まず、今回取り上げた全てのテキストにおいて、「指導計画」は「長期的計画」「短期的計画」に分けられることに触れていた^[19]。

指導計画には、年間の指導計画、月の指導計画などの長期の指導計画と、週の指導計画(週案)、1日の指導計画(日案)などの短期の指導計画があります。そして長期的な指導計画から短期的な指導計画になるにつれ、より詳細な計画になっていきます。

さらに、各テキストに資料として掲載された指導計画をまとめると表2の通りである。計画の全文が掲載されていたものは「○」、一部抜粋で掲載は「△」、全く掲載がなかったものは「×」と示した。一部のテキストでは、特定の年齢のみ、もしくは記載項目の一部分を抜粋した形で掲載していた。

表2. 掲載された指導計画に関する資料

テキスト	教育課程	保育課程	年間・期間	月案	週案	日案
(1)	○	○	○	○	○	○
(2)	○	○	○	○	○	○
(3)	△	△	△	○	○	△
(4)	○	○	○	○	○	×
(5)	△	△	△	△	×	×

全ての計画を全文掲載していたのは(1)(2)のみであった。各テキストでは、掲載された計画に沿いながら、「具体化」についての解説が行われている。この部分はテキストごとに非常に差異が見られた。

(1)では、月案の解説の部分で、年間指導計画における「いろいろな運動に興味をもち、十分に体を動かして遊ぶ」というねらいが、10月の行事を計画に含めることで「運動会に参加することを喜び、友達と一緒に活動することを楽しむ」という「ねらい」になることを資料をもとに解説している^[20]。さらに日案作成のページでは、教育課程から年間指導計画、月間指導計画、週間指導計画までに、特定の「ねらい」がどのように具体化されてきているのかを図でわかりやすく解説してい

る^[21]。

(2)では、長期的計画から短期的計画の関連性については、他のテキストに比べて言及が少ないが、作成の事前準備としての発達像の理解や園内環境の把握をはじめ、「ねらい」や内容、環境構成についての考え方や記載方法について詳細に解説されている^[22]。

(4)では、始めに「保育課程・教育課程」と「指導計画」の関連性について、次のように事例を含めて解説されている^[23]。

たとえばあなたが2歳児クラスの担任だとしましょう。指導計画を立てるうえでまず必要となるのは、保育課程に書かれた保育目標を理解することです。次に、この保育目標に向かい、2歳児の時期にどのような経験が保育

内容として求められているのかを、養護と教育の両方から押さえます。その際、2歳児の保育内容を、その前段階である1歳児と、次の発達段階である3歳児の保育内容との関連を意識しながら捉えることが大切です。(中略＝引用者) また、月間指導計画は年間指導計画をもとに立案され、週間指導計画は月間指導計画をもとに立案されます。こうしたプロセスを経ることで、どの指導計画も保育課程を反映させたものとなるのです。

このように、計画の関連性を解説した上で、(4)では各指導計画に記載される「ねらい」や「配慮事項」「環境設定」に記されている内容について解説が進む。しかし、そこでは、教育課程から年間、年間から月間に、どのように具体化されているかのプロセスについては言及されていない。また、注目すべき点として、(4)では演習課題として、各指導計画の「配慮事項」「環境設定」部分の作成が出されている。こうした構成から、「ねらい」「内容」の部分における長期的計画と短期的計画の関連性を資料から読み取ることは難しくなっている。

5. おわりに

本研究における分析の結果をまとめると、以下の点が指摘できよう。

第一に、計画の必要性をどのように捉えるのか、という点で記載に若干の差異が見られた。計画的な環境構成の必要性については、ほとんどのテキストで言及していたが、保育者間の連携や実践の評価・改善のためにも計画が必要であるという点に言及したのは一部のテキストのみであった。ただし、各テキストでは、別項でカリキュラム・マネジメントや、実践評価、PDCAについて解説しているため、そこでは指導計画の省察について記載されており、全く考慮されていないとは言えない。しかし、こうした保育の評価に関する内容は各テキストの後半に位置づいている。そのため、保育課程・教育課程を学ぶ初期段階で、計画の意義を実践評価と結び付けて認識することは困難である。

また、保育者間の連携は保育において欠かせないものであるが、これと計画の関係性についても十分な記載がなされていたのは、わずかであった。養成課程での講義・演習では、個別や少人数での指導計画作成と実践は経験できるが、クラス間や

園全体での連携について体験する機会はほとんどない。そのため、「保育・教育課程」についての学びの中で、より具体的に複数の保育者間におけるカリキュラム・マネジメントの実践例について取り上げることが求められると考える。

第二に、各テキストでは、長期的指導計画と短期的指導計画の関連について、理念や重要性については全てのテキストで触れていたが、指導計画に即して「具体化」の実際の解説部分になると、記載内容に差異があることが明らかになった。さらに、指導計画を作成する技術を身に着けることを目的に含めるテキストと、あくまでも各計画の作成方法や構成内容、配慮事項についての理解を深めることを目的とするテキストによって、掲載される資料や図表に大きな違いが見られた。

引用文献

- [1]文部科学省. 幼稚園教育要領(平成29年3月). 2017, p6. 厚生労働省. 保育所保育指針(平成29年3月). 2017, p13.
- [2]橋本晴美ほか. 「教育・保育課程論」の授業テキスト(市販教科書)における記述内容の比較分析—長期・短期指導計画の連動に関する説明部分を中心に—. 教育実践研究. 2016, 第1巻, pp.120-130.
- [3]庭野晃子. 「保育課程」と各種「指導計画」の連続性に関する一考察—保育所保育指針(2008)に対応した教科書分析Ⅱ—. 静岡県立大学短期大学部研究紀要. 25(W)-6, pp.1-16.
- [4]岩崎淳子ほか著. 教育・保育課程論 書いて学べる指導計画. 萌文書林. 2015, p18.
- [5]高橋弥生ほか編著. 教育・保育課程論. 一芸社. 2017, p18.
- [6]門谷真希ほか編著. 保育の指導計画と実践演習ブック. ミネルヴァ書房. 2016, p8.
- [7]師岡章. 保育カリキュラム総論—実践に連動した計画・評価のあり方, 進め方—. 同文書院. 2015, p79.
- [8]前掲[6]. p18.
- [9]同上. p18.
- [10]千葉武夫ほか著. 教育課程・保育課程論. 中央法規. 2016, p2.
- [11]前掲[6]. pp.7-8.
- [12]前掲[4]. p18.
- [13]前掲[5]. p18,20.
- [14]前掲[6]. p8.

[15]前掲[10]. p54.
[16]前掲[5]. pp.28-29.
[17]前掲[6]. p10.
[18]前掲[7]. p.174-175.
[19]前掲[4]. p24.

[20]同上. p45.
[21]同上. p.162,165.
[22]前掲[7]. pp.188-202.
[23]前掲[6]. p11.

(受付日 : 2018 年 2 月 19 日, 受理日 : 2018 年 3 月 6 日)

杉山 実加 (すぎやま みか)
現職 : 白梅学園大学 助教